

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ケ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替 〇〇一〇〇一 九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

医療・教育大国の「秘密」

キユーバ革命五十年

滝野 忠……2

賃金論、生産性向上運動への姿勢

—〇九春闘の一総括—

編集部……3

カリブ海の国際主義と亜熱帯の大らかさ

—全労協キユーバ訪問団、革命五〇周年の国へ—

名古屋 哲一……5

恐慌の必然性

—マルクスの理論は現下の経済危機(恐慌)の分析に役立つか?—

訳・原 八峰……8

『ノイエス・ドイッチュランド』(三月二三日) —

真に恐慌を解決する途

—今、なにが問われているか(三)—

伊勢 太郎……11

読者からのおたより

……………13

刊 旬 社 会 通 信

NO. 1047

二〇〇九年五月一日号

二〇〇九年五月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

医療・教育大国の「秘密」

キューバ革命五十年

今年はキューバ革命五十周年の記念すべき年です。

キューバには大きな二つの「謎(なぞ)」がある。キューバのような「貧しい」国がなぜ医療・教育・住宅といった基本的な生活手段を無料にし、かつ何万、何千もの医師、教師を全世界に送り出しさらに貧しい国々から絶対的な信頼を勝ち得ることができているのか。もう一つはキューバがなぜ巨象「米国」の支配に屈することなく尊厳を守り続けてこられたのかである。

この秘密をカストロさんは九九年十一月、ハバナで開催された「第八回ラテンアメリカジャーナリスト連盟会議」の閉会式で演説で説き明かしている。カストロはまず「イデオロギー上の闘い」を強調し、よくいわれるグローバル化について「最もグローバル化したのがデマとうそ」、帝国主義と資本主義が存続することができているのは「おおむねメディアによってばらまかれた主観的要素のおかげ」であったと、社会主義世界体制の崩壊についてこう結論づけています。

「社会主義陣営とソ連は、基本的に自らの過ちによって破壊されたものではありません。うそ、欺瞞、デマ情報などを操るこの(メディア) 恐るべき機構によって破壊されたのです。人々は、信じこまされていったのです。誰一人、消費主義社会の西側世界が、今日想像できる最も素晴らしい世界だという幻想に抗しきれなかったのです。たとえば今世界の人々にくまなく読み書きを教えるための教科書に必要な十倍もの紙を無駄使いしている雑誌があります。雑誌の内容は有名人AかBのゴシップ記事が大半で、世界の人々を百回以上も地獄に送り込めるほどの軽薄さです。社会主義陣営の諸国を破壊したのは、こうしたものすべてであります。こうした宣伝攻勢には、進歩的な理想主義者も対抗できなかったのです。

うそと幻想を送り込まれた国の中には巨大国家もありましたが、狭量な精神と教条主義のようなものがはびこって、(社会主義の) 教義がじつは宗教や官僚主義に変質したり、歴史のゆり戻しを許した事情も多くありました。本来なら社会主義の成熟に向けて大いなる努力が必要だったのが、逆に破壊されてしまったのです。破壊の最大の起爆剤が、資本主義と帝国主義が一貫して喧伝しつづけたうそと幻想であったのです。」

次に前者についてです。資本主義はムダ、資源の乱費でみせかけの「繁栄」を築き上げてきた社会でもあることです。なぜキューバは圧倒的な人的資源をつくり出すことができているのでしょうか。カストロさんはこう続ける。

「紙資源はゴシップ雑誌や広告に浪費されず、医師の養成に投資されたからです。その結果、キューバは、一人当たりの医師数では世界最高位の国になりました。我が国は教師の養成にも投資しました。このようにして、私にはすでに四十年続いている経済封鎖に耐える一方、実にささやかな資源を活用してきました」

さらに驚くのは、米国による四十年以上にわたる経済封鎖。そしてソ連の変節で援

助が打ち切られた中でも学校、デイ・ケアセンター、総合病院はひとつたりとも閉鎖されることはなく、この非常時にあっても、三万人の医師を誕生させることに成功したという事実である。(滝野 忠)

賃金論、生産性向上運動への姿勢

― 〇九春闘の一総括 ―

〇九春闘は予想されたとおりの結果で終わりました。今春闘の特徴は①恐慌下の春闘であったこと、②労・資が「雇用も賃金も」の連合要求で真正面からぶつかりあったこと、③その背景ではワーク・シェアリングについての政・労・資合意が〇二年度に次いで結ばれたこと、④ワーク・シェア実行の条件に労使の自主的判断、生産性向上への努力、働き方に見合った公正な処遇が掲げられたこと、⑤労・資は生産性向上と生産性三原則を共通認識としていたことでした。

マス・メディアの介入

今春闘でとりわけ目立ったのがマス・メディアの介入でした。前哨戦の時、景気の波はバブル状況を示し、食料、中間財、天然資源は値上がりが続け、消費者物価は急騰、これまでの定昇のみの要求は組合員の支持を得られる状況ではなくなりました。連合は物価上昇分は「ベア」でとることを鮮明にし要求を示しました。とつぜんの金融不安からの金融恐慌、そして労働生産過程に恐慌が波及したことで、春闘の情勢は一変しました。

連合はジグザグしながら「雇用も賃金も」の要求を貫きました。労働組合としては当たりまえのことです。これにたいしマス・メディアが「恐慌という非常事態に賃上げ要求とはなにごとか」とかみつぎ、ワーク・シェアリングなる労務管理の手法へと誘導したことです。連合会長はJC回答後の記者会見で「申し分けない結果」と嘆いてみせながら、「運動という面でいい種がまけた」、「内需主導型経済へ何をし、議論するかを思い知らされた交渉となった」、「会社とは何か、配分論を論議したい」とじつに脳天気な話しを続けられておりました。

JC決戦とは言葉は激しいけれど、高木会長の発言にあるように「交渉」なんです。連合や全労連が「内需拡大で景気拡大を」、「大企業の内部留保金を取りくずせ」と主張することはまちがいはありません。恐慌下のものすごい市場収縮のなかでこの主張をおすためには交渉とともに力、つまり労働組合の団結力の行使であるストライキを実施する気迫を示すことがなによりも重要だったのです。

ワークシェアが労務管理の手法に

二つめは今春闘で新たになが見えたかです。まず連合労働運動では労働者の生活は守れないことをあらためて示したことです。財界・政府のおえらがた、さらには大企業労組幹部の人ですら「日本の賃金は世界最高となった」といってはばかりません。本当にそうでしょうか。基準内賃金は約三十万円前後にすぎませんし、手取り賃金を大きくみせている最大の要素が残業になっっているのではありませんか。さらにもう一

つ付け加えれば要員不足です。これも労働者ならだれもが実感していることです。

二つめは生産性三原則では労働運動ならんことです。一九九〇年代後半のＩＴバブル崩壊時生産性三原則の破たんははつきりと示されました。中小労組の組合は「大企業労働組合中心の春闘ではわれわれの賃金は切り下がるだけ。独自にたたかわなければ」とパート共闘、中小共闘、さらには有志共闘を結成し、「ＪＣにはもうたよれない」と戦線を拡大したことはご存じのことです。

連合は今年の春闘で傘下労働組合を五つの大産業別にくくり「たたかう」という新しい枠組みをもさくしてみせました。高木会長が「新しい種をまけた」といったことは、このことを意味していると思われまます。

三つめはワークシェアリングが労務管理の手段として登場させられたことです。これについては本誌第一〇四六（四月一五日）号の『生産性向上の手段となったワーク・シェアリング』をお読みいただければと思います。

同一労働同一賃金の攻防へ

日本経団連は春闘対策のトラの巻として『経営労働政策委員会報告』を出し、企業の経営者に時どきの春闘だけでなく、これからの労資関係全般についての指針を示しています。今年の『報告』で気になったのはこれからの賃金制度のあり方でこれまでの総額人件費管理とともに、「年齢・勤続年数から仕事・役割・貢献度中心の仕組みをつくっていく」ことが強調されていることです。

ＩＴ・ＭＥによる技術革命は労働を単純化し、機械の付属物としてしまいました。かつては年齢・勤続年数は労働過程のなかで単純労働を複雑労働にしていくという要素がありました。たとえば郵便局や鉄道の窓口労働者を思い浮かべてください。郵便局には利息計算というやっかいな仕事がありました。局員さんは複雑な計算をソロバン片手にやりとげる。鉄道の出札（発券）係の労働者は全線の鉄道地図を経験のなかで頭にたたき込んで発券していくといったようになります。

現在はどうかでしょうか。コンピュータがすべてをやってしまいます。労働者の技能はといえば機械操作が早いか遅いかに収れんされていくのではないのでしょうか。機械操作の習熟度はよほど高度な熟練労働以外は若者の方がはやくに決まっています。窓口は二十代前半の若者ばかりで、年輩者はほとんど見られなくなりました。年寄りより若者が覚えがはやいし機械操作もはやいからでしょう。

経営者は若者から「同じ仕事をするのに、年寄りは作業が遅いにもかかわらず賃金はおれたちの二倍、三倍もとっている。これは不公平だ」という声が出されている、と公然と述べるようにもなりました。同じ仕事をしているのなら年輩者も若者と同じ処遇しなければならぬ、そうした是正が必要としたいのです。

資本家はこれまで労働者・労働組合が賃金底上げを目的に主張してきた「同一労働同一賃金」を、年輩者の賃金を引き下げ若者との賃金格差を低めることによって、総額人件費管理をさらに徹底したいとの新しい攻撃と考えることができます。いよいよ賃金とは何かが理論的にも実践的にも問われる時代に入っていくのです。このためには①生産性運動の根本的批判、②賃金論の宣伝が絶対の条件になります。

カリブ海の国際主義と亜熱帯の大らかさ

—全労協キューバ訪問団、革命五〇周年の国へ—

「全労協キューバ訪問団（〇九・一・二四〜二・一）」二八人の旅は、心地よいもなかった。

不自由と感じた規制や、官僚的な物言いなどは、一度も見聞きすることがなかった。けれども、「具体的な事柄はその全具体性を検証」してホントの実態が判明するので、五泊六日のキューバ滞在だけで何かを断定することはとても出来ない（九日間のツアーなのに、行きと帰り各一泊をカナダ・トロントで費やすという飛行便の不便。国交樹立から八〇年も経つのに、米国大好きな日本政府がここでもサボだ）。

見聞録スケッチ

カリブ海最大の島は本州の半分の面積で、住人二二〇万人の九割弱がムラート（白人と黒人の混血）と白人、一割強がアフリカ系黒人、一%が中国系アジア人で、人種差別のない国として知られている。反革命の拠点米国フロリダからは南へわずか一八〇km、フィデル・カストロ暗殺の試みが六〇〇回余もなされた。米国の国際法違反の経済制裁で化学肥料等とは縁遠くされ、有機農法の国としても有名だ。医師数の人口比率は世界一で他国へも医療支援、また抗がん剤などバイオ技術への投資に力を入れている。

子供たちは元気がいっぱい表情は明るくにこやかだった。日本の子供のように管理・過干渉・競争に縛られていたらこのようにはなれないと思う。ヒッチハイクを時々見かけた。日本では、見知らぬ人の車に乗るのも乗せるのも無用心の極みとされているが、以前の日本にもあった社会の絆・人々の信頼関係が生きている。

ハバナのホテルの窓から隣のビル建設現場が一望でき、機械の少なさ以上にユッタリ・ノンビリの労働者の動きに驚いた。「非効率！」の文字がとっさに日本人であるボクの頭に浮かんだが、物資の調達不足、亜熱帯気候に適した伝統的習慣的な働き方、労働の仕方の労働者による自己決定、ワークシェアリング、日本での搾取率百%〜二百%以上の資本家取り分がないだけこれで十分なのかも、大量生産大量消費とは違う価値観なのかも等とも考えてはみた。マアとにかく、「尻叩きされながらクビや左遷に脅えてサービス残業競争の末に「過労死」という日本よりは、また一九五九年一月一日革命以前のバチスタ軍事政権下での奴隷的貧困労働よりは、ずっと良いはずだ。

「アラファイブ？」の女性スサーナさんが七日間ずっと付き添い、バス内や見学、交流場所でのガイド・レクチャー、通訳をマルチに熱心にこなしてくれた。彼女は、訪問団の誰に対しても、またキューバ諸組織の役員に対しても同じくフランクで、「何かを隠すではなく多くを知ってもらおう」という感じで、自分の生活費内訳・女性に対する不平等二回は結婚するのが多いというキューバの恋愛観等も紹介してくれ、そして革命祖国とかゲバラとかを愛しているように思え好感が持てた。他の人だったなら、キューバ社会への好印象がこれほどではなかったかもしれない。

「自分の目で耳で、実際のキューバに十分接してみてください。経済的困難はあるけれども、人々の暖かさや祖国愛に触れることができるでしょう」。組合役員の人などは、朗らかに自信をもって、こう促してくれるのだった。

キューバの国際主義はハンパじゃない

一九七〇年頃、ボクが二〇歳前後の若いときに、胸躍らせ涙しながらチェ・ゲバラの書いた本を読んだ。『ベトナムに平和を！』をさらに押し進め「二つ三つ・・・もっと多くのベトナムを！」と、米帝への国際的共闘を訴えていた。

当時ちよつと耳に入ってきたのは、フィデル・カストロやキューバをソ連や北朝鮮と同様にヨイショする話や、カストロは一国主義だがゲバラは国際主義だというような話だった。だが、これらは「全具体性を検証」して得た実態のお話ではないように思われる。

国際主義は、ロマンチズム以上に現実主義の問題だ。革命的祖国防衛のためには国際的な反帝国主義運動の拡がりが必要だし、国際的な革命の拡がりのためには革命的祖国の防衛が必要だ。両輪がないと車は動かない。

社会主義とは、真に自由に主体的に生きられる「人類の後史（マルクス）」という概念であり、「二国社会主義論」というスターリンが言い出したトンデモ話とは違い、そもそもが国際的・世界的にしか実現できない。現在の過渡期世界において、革命的祖国の社会主義的発展のためには、国際主義は必要不可欠な経済的現実主義なのだ。

最も基礎的な一ペソ紙幣には、キューバ第一の英雄ホセ・マルティと彼が射殺された場面（兌換ペソ）が印刷されており、二番目に基礎的な三ペソ紙幣には、チェ・ゲバラと彼が指揮した列車襲撃場面（兌換ペソ）が印刷されていた。

ホセ・マルティは、一八九五〜九八年の第二次独立戦争のリーダーで、九八年一月にキューバは四〇〇年間のスペイン支配からは独立した。だがこの時九八年二月に米西戦争が勃発し米国が勝利、キューバを米軍政下においた（「キューバ共和国」は一九〇二年五月二〇日に成立、そしてナント、国名は現在までそのまま引き継がれている。そしてナントナント、国旗は一八四九年にできて以来ずっと愛国者の闘いと共に引き継がれ、その中の赤色は独立闘争で流された血の色なのだ・・・日の丸の赤とは大違い！）。

独立革命は、通常は「民族国家の形成」などブルジョワ革命の範疇（はんちゆう）に入るのに、マルティは当時すでに「米国支配からの独立のためには、プエルト・リコへ革命を拡大しなければならない」と唱えていた。米国のお膝元のカリブ海・ラテンアメリカでは、国際主義は差し迫った現実的課題であり、キューバの国際主義は歴史的筋金入りなのだった。

質問「民主主義と官僚制」&「中南米革命」

サンタクララにあるキューバ労働組合センター（CTC）県本部を、一月二八日に一時間半、表敬訪問した。CTCは革命後ではなくて革命の二〇年前に結成、今年七

○周年を迎える。各労組代表など女性四人男性二人が壇上に並びにこやかに迎えてくれて、まずは二〇〇三〇分ほど「CTC」についてのレクチャーを受けた。

「この労働者の九八%が加入するCTC委員会の目的は、第一に米国の経済封鎖に対し革命と社会主義を守ることに、第二に生活レベルのアップのため生産率と経済の向上を図ること」「医療も保険も、労働者を守ることに全てが労組の役割。○六年一月等のハリケーンによる工場や家屋災害との戦いも労組の役割だ」「住宅はポロダがけっこう皆満足していて、一生懸命働いている」「県からは五〇ヶ国へ派遣をしている。余っているものを分けるのではなく、持っているものを皆で分けあうのが支援だと思う。ラテンアメリカ・アフリカ・欧・米・アジアにいるキューバ入は多い。私たちも諸国労組から支援を受けてきた。皆さんとの交流は貴重なものだ」。

訪問団団長からの「七年前の訪問団や反米軍基地や全労協二〇周年」など返礼挨拶の後、CTCの人が「何でも聞きたいことがあれば」と言い、四人の質問に対して丁寧に答えてくれた。答えたのは一人の男性ばかりだったが、少し気にはなったが。初めに「ブエナス云々(今日は)」とスペイン語でカツコヨク挨拶して「ブエノス云々(おはよう)だよ」と訂正された後、ボクは二つの質問を日本語でした。

「一つは、キューバの民主主義について。ソ連は官僚が牛耳り民主主義がなかったから資本主義にやられてしまったと思う。労働者階級が官僚層から権力を奪い返し真の労働者国家になることを期待していたが、逆に国際資本主義が労働者国家の基盤もろとも崩壊させてしまった。キューバは米国から凄まじい攻撃を受けながら、ソ連のようにならない成功の秘密は何なのか？ 今日までと現在の抱えている困難や矛盾、及び、将来の展望も聞かせてほしい」「もう一つは、国際主義・中南米革命の見通しについて(現在、親米保守政権はコロンビアとメキシコの二国のみ)。日本の運動はしよぼくられていて貢献できず申し訳ないけれど、キューバの果たしている役割は大きいと言われているが？(ベネズエラ等への医療スタッフ派遣は有名だ)。」

「その質問に答える前に、まずキューバの闘いの歴史(的継続性)を述べておきたい」と言って「一八八八年からの第一次独立戦争、一八九五年からのホセ・マルティ率いる第二次独立戦争、一九三三年革命の不成功、そしてついに五九年革命での達成。国民自らの戦いによって成功したのだ。労働者はこの中で大切な働きをした」と説明してくれた。

「1国有化、2土地改革(一気に全てを国有農場にするのではなく、部分的に自営農もOKだった・・・ソ連ネップの歴史とは異なる道を歩んでるようだ)、3識字運動(銃ではなく鉛筆を手に掲げての大デモのパネルを後日見れた)、4教育・医療などの無料・平等制度、5独立前のメイド買春や女性・黒人差別等の克服、これらは既に達成し社会の基盤となっている。教育の成果⇨才能の開花が九〇年代から現れている」

「政府を下から選んでいる。優秀な人(努力する人・利己的でない人?)が共産党に参加し、政府と一緒に仕事をしている。汚職や腐敗はない。国民が指導部を信頼している」

「九一年のソ連崩壊により大変な困難に見舞われ、そして米国は経済封鎖を強めた（ソ連原油等の供給停止、停電・品不足・貧困等）。この危機にそれまでの成果によって耐えることができ、現在は経済の回復過程に入っている。貧しい国への派遣や国際連帯もしている。将来の心配はまったくない」

「米国政府と同じ姿勢の諸国政府に反対する、連帯闘争を私たちは求めている。一国では無理だからだ。そして、世界的な食糧危機など一国で解決できるはずがなく、国際連帯が必要だ」「アジアの津波の際には、キューバ人も駆けつけた」

この後、訪問団の数人から「KY（空気を読めない）質問」と冗談半分に言われたが、「KY（空気を揺すぶる）のが好きなのだからしようがないし、とにかく、FKY（漢字を読めない）」太郎首相とは違う姿勢の受け答えに接しえたのだった。

（名古屋 哲一）

恐 慌 の 必 然 性

―マルクスの理論は現下の経済危機（恐慌）の分析に役立つか？（上）―

この論評は三月一三日付けドイツの左翼日刊紙『ノイエス・ドイッチェランド』に掲載された、「マルクスの理論は現下の経済危機（恐慌）の分析に役立つか？」と題する紙上討論の一つ。この討論はマルクスの二二六回目の命日（三月一四日）にちなんで企画されたもの。

筆者のミハエル・ハインリッヒ（一九五七年生まれ）は数学者で政治学者。彼は批判的社会科学のための雑誌『PROKLA』の編集者であり、ベルリンのFU（自由大学）とウィーン大学で教鞭をとっていた。現在はベルリンの技術・経済専科大学で教えている。最近彼は『マルクスの資本論をどう読むか？』（二〇〇八年）と『政治経済学批判・入門』（二〇〇四年）を公刊している。

高まるマルクスへの関心

昨年の金融危機の拡大によって、カール・マルクスの人と著作もまたいっそう強くマスコミの注目するところとなった。マルクスへの関心はすでに数年来一貫して高まってきた。去年の秋『資本論』第一巻が売り切れになったことは、ひとえにこうした動向の頂点を印した。しかしマルクスは現在の経済危機（恐慌）を目の前にして、なおもわれわれに何を語らねばならないのか？ マルクスに対する新たな関心は、体制側の経済学が置かれた貧弱な状況の反映に過ぎないのか？

何よりもまず、大学において支配的な新古典派は、確かにますます練り上げられた数理モデルを開発してきたが、しかしその際経済の現実との接点を広く失ってしまった。その標準モデルは、完全な競争、完備した情報、そして最後ではあるが負けず劣らず重要な、マルクスによってすでに批判済みの「セイ法則」の有効性から出発している。「セイ法則」は、いかなる供給も同量の需要によって呼び起こされる、なぜなら供給される商品の生産は、生産物を生産する従業者のもとでの事前生産物と収入に応じた需要を生み出すであろうからである、と主張する。このような前提条件の下では恐慌は起こりえない。しかしながら、恐慌が起こるとすれば、それは行為者の「非合理的な」行動あるいは「外部からの」（すなわち市場システムの外部からの）ショックだけが原因たりうる、―と。

深刻な経済・金融危機（恐慌）に遭遇して、支配的な新古典主義の教義は全く頼りにならないことが判明した。それは恐慌を説明することも、それを克服するための有意な対策を提示することもできない。その代弁者たちのステートメントは、気まずさにかけては誰も乗り越えられない。恐慌はいずれまた過ぎ去るであろうが、われわれはそれがいつか分らないだけだ、と連邦政府の学識経験者による諮問委員会議長ウォルフガング・フランツは述べた。これに対してケインジアンたちはもつとましである。彼らは、唯一経済的能力を持つ国家に依拠して需要不足を補おうとする。とはいえ、彼らの恐慌説明はかなり浅薄で、たいていの場合、国家は過去においてその需要不足を補填する役割を果たさなかったので不均衡が累積しえた、ということになる。

マルクスの核心

今マルクスが活動を始めるとするならば、人はまず、そこでいかなるマルクスかを問わねばならない。何十年もの間、マルクスは「社会主義諸国」の中で単なるキーワードの提供者―それによってそのつどの政策あるいは「社会主義の建設」の名の下に理解されたものが合理化された―として利用された。決定が行なわれた後で、それにマッチする引用文が、装飾に役立つものとして探し出された。しかしながら、すべての重要な問題に解答を用意している包括的世界観としての「マルキシズム」は、マルクスのものではなかった。彼の義理の息子（娘の夫）ポール・ラファルグがフランスにおける「マルキシズム」の事始めについて彼に報告したとき、彼（マルクス）は怒って「私はマルキシストではない」と叫んだ。

マルクスは、彼の主著のタイトル『資本論―政治経済学批判』が明かにしているように、資本主義の批判者であり分析者だった。この批判は、道義的なものとして、資本主義の中で行なわれている労働者に対する搾取の「不当性」に対する批判として、理解されたことは稀ではなかった。今日でさえも道義的批判は、常軌を逸した役員報酬や銀行家に対する何百万（ユーロ）の退職慰労金―彼らの経営政策が何十億（ユーロ）もの損失をもたらし、しかもそれを今度はタックスペイヤーが負担しなければならぬ―を目の前にすれば、確かな根拠（正当性）が与えられる。ここまではまあよしとしておこう。しかしマルクスにとってはこのような道義的な批判は問題ではなかった。まさに『資本論』の中で、彼はたくさんのおざけりを、公正の理想と道義的規範に依拠して資本主義を批判しようとした社会主義者たちにぶちまけた。

マルクスの要求はむしろ、科学的な分析のなかで資本主義の機能の仕方を明示することにあつた。彼は『資本論』の序文で述べているように、「現代社会の経済的運動法則」を暴露しようとした。こうした科学的な作業から、彼は決定的な政治的効果（影響力）を期待した。彼はある手紙の中で、『資本論』は「ブルジョアの頭に投げつけられた最も恐ろしいミサイル」である、と書いている。すなわちマルクスの分析は、資本主義的な富の生産は決して社会的階級（複数）の調和ある協力も利害の調和ももたらさないと結論を得た。マルクスは科学的な方法で、技術や生産力の資本主義的発展（開発）は必然的に破壊的な過程―それは、マルクスが『資本論』第1巻の中で

書いているように、「すべての富の源泉を掘り崩す、土地と労働者を」——であったことを明らかにしようと努力した。マルクスはモラル上の理由から資本主義的な生産方法に対する抵抗を期待したのではなく、この生産方法は人口の大多数を占める人々の基本的な生存条件を損ねるであろうとの認識からであった。

「株式売買の駆け引きの中ではないとも、いつか嵐が襲うに違いないと誰もが知っているが、しかし誰もが自分自身は黄金の雨を受け取って安全な場所に退避させた後、隣のやつの頭に雷が落ちることを願っている。」——K・マルクス、MEW（マルクス・エンゲルス全集二三）、二八五ページ

マルクス時代の先駆け

まさにマルクスの論証の科学的な質は、しかし今日議論の余地がある。ドイツの大学で教えられているような体制派の国民経済学説は、いずれにせよマルクスへの取り組みを放棄することができると考えている。社会学および政治学の専門分野においてさえ、マルクスの理論はせいぜい端に置かれているだけである。とりわけ「経済に奇跡」といわれた時代に、資本主義はいまや恐慌知らずで発展し、賃金労働者の生活水準も着実に向上させるといった、マルクス理論に異議を唱える様々な反論が、今日でもなおいやになるほど聞こえてくる。

もう一つの反論は、少なくとも一見したところもつともらしく見える。つまりマルクスの資本主義分析の古さ。マルクスが優に一四〇年前に定式化したものがその後起こった大きな変化から見て、一体なお有意性を持ちえるのか？——という反論である。それに対しては、マルクスの研究の対象は決して一九世紀のイギリスの資本主義ではなかった、と反論することができる。仮にこれが事実だったとしても、かの批判者（マルクス）は正当性を持つ。すでに言及した『資本論』への序文の中で、マルクスは、彼の時代のイギリスの資本主義——当時それは最も広範に（進んで）展開された資本主義の形成だった——は、彼にとつて単に理論表現のための「イラストレーション」（説明材料）として役立った、と強調している。マルクスは『資本論』の中で何を問題にしたかについて、彼は第三巻の終わり、「資本主義的生産方法の内部構造を、いわばその理想的な断面（切り口）で」表すことであった、とみずから総括している。特定の歴史的な特徴づけではなく、資本主義を資本主義たらしめているもの、必然的に資本主義に付きまとうもの（属性）がマルクスの研究の対象をなしたのである。

そしてこの研究によって、マルクスは時として時代に大きく先駆けていた。彼が『資本論』第一巻のなかで「相対的剰余価値の生産」として、資本主義的生産力の発展と労働力商品の価値の低下およびそれに伴う剰余価値の増大の関連を分析したことは、労働者によって消費される大量の食料品と消費財が資本主義的に生産されて始めて機能する。こうして初めて生産力の増大がマルクスによって分析された方法の中で実現される。しかしそれは二〇世紀に「フオーダイズム」によって耐久消費財の大量生産が始まり、労働者階級の消費を根本から変えたときに初めて現実となった。

『ノイエス・ドイッチュランド』三月十三日、訳・原 八峰・つづく

真に恐慌を解決する途

—今、なにが問われているか(三)—

恐慌の可能性

世界恐慌を前に「恐慌論」がさかんに論じられています。資本主義を前提とする論者は政策がしつかりしていれば恐慌は回避することができる、今回の恐慌は金融機関への管理・統制が十分でなかったことで起きた、したがって金融監督・規制を強化することがこれからの資本主義再建への根本問題と、三月二〇日におこなわれた国際金融会議(G20)最大のテーマとしたことにあきらみかです。

金融監督をしつかりすれば資本主義社会から恐慌がなくなるほど資本主義は牧歌的な体制でしょうか。けつしてそんなことはありません。なぜなら資本主義社会はその根っ子に恐慌を必然的におこす基本矛盾を内在させているからです。マルクスは『資本論』第一巻第一篇商品と貨幣、第三章貨幣または商品流通の第二節流通手段「商品の変態」で、商品として生産された生産物は売りと買いが分立させられている。そこにもっとも単純であるけれど資本主義社会では恐慌が発生する「可能性」があると述べています。少し難しいのですが、資本主義的な生産方法の矛盾がなぜ社会主義的な生産方法に変えられなくてはならないかのもっとも大切な点ですから、その箇所を引用します。

「独立して相対する諸過程(商品の売りと買い)が一つの内的な統一をなしていることは、同様にまた、これらの過程の内的な統一が外的な諸対立において運動するということも意味している。互いに補いあっているために内的に独立していないもの外的な独立化が、ある点まで進めば、統一は暴力的に貫かれる—恐慌というものによって。

商品に内在する使用価値と価値の対立、私的労働が同時に直接的な労働として現れなければならないという対立、特殊な具体的労働が同時にただ抽象的一般的労働としてのみ認められるという対立、物の人化と人の物化という対立—この内在的な矛盾は、商品形態の諸対立においてその発展した運動形態を受け取るのである。それゆえ、これらの形態は、恐慌の可能性を、しかしただ可能性だけを、含んでいるのである。

この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだまったく存在しない諸関係の一大範囲を必要とする」(『マル・エン全集』23 a、一五〇ページ)。

株式会社 所有と経営の分離

恐慌は資本主義的生産の総過程としてあらわれます。産業資本の蓄積・集積・集中の運動は産業資本を大きくするばかりか、機械装置、運輸手段の巨大化は投資資金を厩大にふくらませ、自己資本だけでなく他人の資金を資本として利用する会社のかたち、すなわち株式会社を生み出すことになりました。株式は証券として売買されますから証券取引所が銀行とともに資本主義の動脈に、そして信用制度をつくりあげてい

くのです。株式会社についてマルクスはエンゲルスへの手紙（一八七七年七月二三日付）で次のようなたいへん重要で興味あるたよりを寄せています。

「彼（ヒルシュ）は、フランスのすべての工業企業がほとんど一般的に株式会社に変わる。という興味のある報道を僕に伝えてくれた。第一に、これは帝政時代中に立法によって容易にされた。第二に、フランス人は事業を好まないで、むしろ、できれば金利生活者として衣食しようとする。そのためには、この企業形態はもちろん神の恵みなのだ。」（マル・エン全集『書簡集』34、四六ページ）

「この企業形態はもちろん神の恵みなのだ」、とくにおもしろいとお思いになりませんか。資本主義的生産様式の独得な点は、すべて既存の資本価値をこの価値の最大可能な増殖のための手段とすることに向けられていることにあります。信用制度の発展、貨幣資本の集積は製造業に資本を投ずるよりも、大昔からあり資本の原初的な形態である高利貸資本を新たなかたちで再生産したのです。

恐慌克服と資本主義

恐慌はつねに、ただ既存の諸矛盾の一時的な暴力的な解決でしかなく、攪乱された均衡を一瞬間回復する暴力的な爆発でしかありません。これまでくり返し述べた『共産党宣言』（岩波文庫版、五一ページ）に簡明に記されているとおりなのです。重要な箇所ですから再度利用しておきます。

「ブルジョア階級は恐慌を、何によって克服するか。一方では、一定量の生産諸力をむりに破壊することによって、他方では、新しい市場の獲得と古い市場のさらに徹底的な搾取によって。つまりどういうことか？　つまりかれらは、もつと全面的な、もつと強大な恐慌の準備をするのであり、そしてまた恐慌を予防する手段をいっそう少なくするのである」

社会主義の根本は資本主義を知ること

ここに資本がどうやって「克服」するかは明らかです。問題は労働者と家族はどうすれば恐慌を必然としない社会、新たなコミュニティをつくりあげられるかです。ソ連・東欧社会主義国家群の崩壊は生産物の商品化↓価値と使用価値の対立を根本的に取り除くコミュニティ、計画経済社会の信用を失墜させてしまいました。

まず社会主義とはなにかが学び直されなければなりません。『資本論』が当初『経済学批判』として構想されたことに明らかですが、新しいコミュニティの全体像は資本主義的生産様式の根本的批判から始まる他ないからです。

向坂先生は「知は力」との言葉を好んでいらつしやいました。私の書棚には向坂先生がくだすった著書が山ほどあります。そのいずれにもこの言葉が記されています。

「知」とは資本主義の本質―もつと大きくは人間として成長することかもしれない―をしつかりとらえること、「力」とは「知」を現実社会に適應する能力ということになるのでしょう。「知」は社会主義社会をつくる「力」になるといっわけです。

新しいコミュニティ、社会主義をつくる勢力が搾取という目に見えない鎖で縛られている労働者階級です。エンゲルスは一八七五年三月のアウトグスト・ベールが「ゴ

「タ綱領」をどう理解すればよいかとの質問に、「労働組合によって労働者階級を階級として組織することについて、まったく一語も述べていません。しかも、これはきわめてだいじな点です。なぜなら、これはプロレタリアートの本来の階級的組織であり、そのなかでプロレタリアートが資本にたいするその日常の闘争をたたかいぬき、自己を訓練する組織、今日では最悪の反動（今日パリにあるような）のもとでも、もはや断じて破壊されえない組織だからです。ドイツでもこの組織は重要な地位を得ているのだから、われわれの意見では、綱領のなかでこれに言及して、できれば党の組織中にそのために場所をあげておくことが絶対必要です」（マル・エン全集『書簡集』34、一〇八〜九ページ）。労働組合は新しいコミューニティーの学校であるとの主張です。これと同じ主張は『宣言』にすでに著われています。具体的には「ときどき労働者が勝つことがあるが、ほんの一次的にすぎない。かれらの闘争の本来の成果は、その直接の成功ではなくて、労働者の団結がますます拡がっていくことである」（岩波文庫版、五五ページ）。さらに「こうしてプロレタリアは階級へ、したがってまた政党へ組織されるが、それは労働者自身のあいだの競争によって、常にくり返し破壊される。しかしこの組織はそのたびに復活し、次第に強く、固く、優勢になる」（同、五六ページ）とも書いています。

「資本主義的合理化」 反対が組織をつくる

今の労働者階級の状態はといえば新しいコミューニティーを構想する労働者諸政党は小さくされ、労働組合はいえれば生産性三原則という搾取強化に賛成する幹部たちに専有されたかの状況を呈しています。こうした状況下では「新自由主義」は市場経済原理主義に立ったアメリカ型資本主義、じゃアメリカ型資本主義とは何かと問えば①株主資本主義、②「金融主義」、③カジノ資本主義だったといい、労働者を大切にする資本主義、「モノ作り」を大事にする資本主義に転換することが必要で、そのためには金融規制強化がとりわけ必要というばかりです。そして、労働者の多くはその傾向に流されようとしています。

今度の恐慌は労働者が情勢に振り回されなくつてすむためには、恐慌、したがって資本主義の本質を知ること、さらに生産性三原則、資本の生産性向上と真正面から対抗できる労働者の組織づくりこそが必要ということを明らかにしてくれたことです。向坂先生は『資本論』第一巻、とりわけ第二三章の資本主義的蓄積の一般的法則を強調されるかたわら「資本主義的合理化反対運動」にもとづく組織づくりに全力をつくされました。向坂先生は新しいコミューニティーをつくる強固な組織はそうした「知」でつくられた労働組合、党であることを誰よりも大事にしておられたのでしょうか。

◇ 読者からのおたより ◇

大恐慌が自治体財政直撃 「市岐商」に眼を奪われているうちに、東海地区の経済悪化が各県財政に反映し、岐阜、愛知、三重の三県職に賃金引き下げが提案されました。県内では御用組合で、県の裏金作りにも力を貸してきた県職組が、賃下げを飲めば、県内市町村への波及となります。

多治見市では、市民病院を指定管理者制度に移行させ、民間の社会医療法人に運営させるとして

います。県内初の試みですが、市長は市職労出身の市議・県議を経た（元民主党）人物です。「市岐商」は三月議会にむけて、市長は多数派工作を市会議員に対して行っているようですが、仮に三月議会で「立命館」移管を決議しても、県の承認が必要で、こちらもハードルが高いようです。古田県知事は「認可は難しい」と言っていますし、県議会の自民党の大多数が反対で、県議会で、自・共が同じ歩調です。県財政が赤字だと言いながら、またぞろ巨大事業に無駄なお金がつぎ込まれようとしています。（岐阜・K）

編集部より 県議会が否決。市岐阜商の存続がその後を決定します。運動あるのみの証明です。武庫川ユニオン市役所分会 四月から嘱託職員に 尼崎市の住民票入力業務で働いていた派遣職員が、昨年三月三日から無期限ストで闘い抜き、四月から臨時職員として雇用されました。その後、今年からの雇用については一月九日に尼崎市と交渉を行い、「市民課で四月より嘱託職員として雇用する。細部についてはユニオンと今後協議する」と回答がありました。厳しい闘いでしたが、全国の仲間の支援により安定雇用を実現することが出来ました。兵庫県では自治労臨職評の長い闘いの中から嘱託職員であっても安定雇用を実現させています。（兵庫・M）

ついに二百回目 私たちにとって心から新年を祝えるのは一〇四七人の解雇撤回・JR復帰をめざす国鉄闘争の勝利解決によって。二〇〇九年はぜひ祝杯をあげたい。すでに二二年の闘いです。毎月一六日の京都駅前定例宣伝行動は本年二月一六日をもちまして、ついに二〇〇回目を迎えます。一九九〇年四月一六日、国労や全動労組合員の一〇四七人が国鉄清算事業団から「二度目の解雇」を受けたときからです。（国鉄京都共闘）

編集部より とにかく長い。闘争団に敬服、なにがなんでも勝つてもらわなくちゃ！。論調がおもしろい No.一〇四六号に『資本論』学習講座の記事がでていました。私もその講座に参加しています。前回講師がドイツでは『資本論』の学習会が盛んになったとの話があり、特にその中で、第一巻だけを読めば良いと主張する人が多いとの事でした、日本でも以前、一巻だけ読めば「資本主義」は理解出来るとする「一巻主義」？の考えがありました。それは一巻が資本主義の使用価値や価値など「剰余価値の生産」の秘密が暴露され、さらに直接生産過程と併せて第二章七節で一程の歴史的展開があり結論があるので、『資本論』は起承転結していると考えたのでしょうか、さらに一巻だけがマルクス自身の手により完成している点が理由かも知れません。しかし、私が思うには、現代資本主義社会を覆っている諸問題を考える時、商品生産過程だけではなく、資本の流通過程の研究は欠かせない課題だと考えます、すなわち独占資本による、資本の流通過程を通じた強蓄積運動（資本の蓄積・集積・集中）の結果として金融資本等のなれの果ての姿が現代ではないでしょうか。

たしかに、二巻三巻はエンゲルスによって、マルクスがたくさん残した「草稿」から寄せ集められ、まとめられたものですが（詳しくは『資本論』向坂訳、岩波文庫4分冊p.37）。マルクス自身は一巻を発刊してから死に致までの一七年間、二巻の完成のために病魔と闘いながら、思索に思索を続けて亡くなったのである（二巻の草稿は第一から第八草稿まで残している）。

エンゲルスの編集に対して文句を言う学者は多いが、私はそう思わない、ここに残されたものから自分自身の頭で何を学ぶのが試されているのだと考えるからである。そうした意味では一巻は二巻への基礎であり、二巻は三巻の総過程理解への足場であると考えるのである。

それにつけても最近の「社会通信」にはNo.一〇四六の小林晃さんや、No.一〇四三の原野人さんなど、本来のマルクス主義的論調が多いことは大いに歓迎する次第である。（東京・鈴木賢二）

編集部より 嬉しいお便りに感謝です。キューバ行きまもなくですね。「おみやげ」期待です。余分ありましたら 第一〇四三（四月一日）号、余分がありましたら二〜三部を、次の発送時にください。（東京・H）

国鉄闘争に連帯 三月六日、柏（千葉県）地区でも闘争団激励集会を開催しました。「三月決戦」に参加したかったためです。加藤弁護士からは元気をもらいました。判決前の解決は遠のきまじうが、総裁でもみんなが小さなことを積み上げてゆこうと確認し合いました。しかし、政治はどうなっているんですかねエ。あきれています。（あびこ市・I）

編集部より 他の友人たちからも聞きました。三月二十五日の判決は残念。闘争団の仲間たちは最高裁に上告、被告・鉄建公団もただちに上告。鉄道運輸機構等の二つの裁判は今年中に結審、来春判決とのことです。たたいはまだまだ続く。

情報送ります いつも「通信」楽しみ。私もニュース等、情報を送りたい。（明石市・T）編集部より うれしいお便りに感謝です。寝る時間もないんじゃないやありませんか。お身体大切に。